
白黒闘争～夜桜の巻～

桜坂電波塔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白黒闘争〜夜桜の巻〜

【Nコード】

N7918V

【作者名】

桜坂電波塔

【あらすじ】

とにかく敵にボールを当てて捕獲する！

至極単純な要^{かなめ}のオリジナルゲームをオリキャラ達がやってみた。
前後篇完結の短い会話ログ型小説。

白黒闘争前篇（前書き）

奏音の復活（？）記念の小説です。

アイデアは要に出してもらって無計画に書いてしまいましたが、
話で終わるはずで、
2

白黒闘争前篇

広い広いギルドの敷地。

その中は閑散としていて人気はない。

何故なら…

クロム「皆っ！白黒闘争始めるよー」

白黒闘争〜夜桜の巻〜

シオン「で、白黒闘争ってのはなんなんだよ？」

新参者のシオンはルールを知らないものの、他の皆さんはすでに理解済みのご様子。

すみっこで震えだしてる奴までいる。

クロム「よくぞ聞いてくれましたシオン君 それじゃ、ルール説明するよー。」

ルール

白黒闘争とはとにかく敵チームにボールをぶつけて捕獲するゲーム。

このゲームはポイント制で、ゲーム終了時に多くのポイントを持っていたチームが勝ちになる。

まず、白と黒の2チームに分かれて、スタートと同時に全員がスタート地点からエリア内のどこかにワープされる。

それからは相手チームの人をさがし、専用のボールを当ててHPメーターを減少させる。
ヒットポイント

HPを減らして捕獲ボールで捕まえる(10点)

捕まったものはボールの中で捕獲者と一緒に行動する(ポケモンのように)

捕まったものは、捕獲者が敵チームに捕獲されると、2等身のチビキャラになるというハンデ付きで解放される。

ちなみにHPは全快し、解放すると、5点ポイントが追加される。

もしHPがゼロになった場合、相手チームに1点が追加される。

そして、ゼロになったものはHPが全快し、エリア内の別の場所へ強制ワープさせられる。

ゲームに個人の武器の使用は可能で、防御にでも攻撃にでも使用できる。

ただし、武器で直接相手に触れてもダメージはない。

あくまでボールをあてないとHPは減らない。

その代わり、仲間のボールによるダメージはない。

攻撃用のボールには、色々な大きさ、重さのものがあり、各々の腰のポーチから好きなボールを無限に出すことができる。(それはもう、四次元ポケットのように)

エリア内には時々回復アイテムが出現し、それを取ることによってHPを回復することができる。

ただし稀にHPが減る毒入りも混ざってるので注意。

クロム「…と、こんな感じかな」

玲羅「とにかくやってみればわかるよ。きっと」

シオン「てか俺的には2等身てのが気になるんだけど」

玲羅「諦めよう、仕様だ」

シオン「無駄に笑顔！」

キール「おい、その馬鹿共ー、とりあえずチーム分けするぞー」

「「今行くよー」」

シオン「馬鹿って部分に突っ込めよ!!」

ティム「とりあえず、このゲームだと鬼神のごとく強い玲羅とクロムは別チームで、後はくじで適当に分けたんだけど」

サード「いいんじゃない？面白いもの見れそうだし」

白チーム

玲羅、クレイズ、フラウ、ローゼ、直耶、サード、エアリス

黒チーム

クロム、シオン、秋葉、キール、ティム、桜、翼

秋葉「…ていうか少ない？」

キール「そりゃ後の連中は今日の空気に嫌な予感を感じて事前に逃げたからな」

クレイズ「……俺死にたい」

キール「こいつは例外だけど…」

クロム「じゃあ、始めるよー」

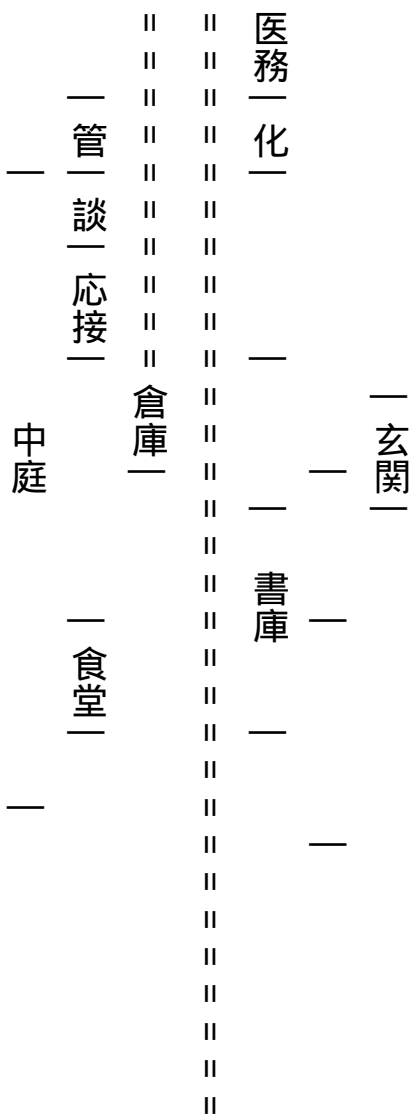
制限時間は20分。白黒7人ずつ。

フォンッ

全員がスタート地点の談話室からワープしてゲーム開始。

ちなみにエリアはギルドの1階部分。

医務室、化学室、管制室、談話室、応接室、玄関、書庫、食堂、倉庫、中庭があり、それぞれTの字状の廊下に面しており、



こう言うような形状になっている。

桜「あれ？私だけスタート位置ですか」

ワープして同じところにてきたギルドマスター桜。

武器とかないので素手でボールを持っている。腕力とかどうなのだろうか…？

桜「とりあえずここにいてもアレですし出てみましょう」

何の警戒もなくあっさり扉を開ける桜。

同時に隣の管制室からも全く同じ考えの人が出て来た。

キール「ん？ああ、桜さんか」

桜「ああ、キールさん。いきなり出てくるから驚きましたよ」

いやいや、あんたも同じだから。

キール「とりあえず、桜さん、武器とかないし一緒に行こうぜ」

桜「ありがとうございます。是非お願いします」

フラウ「お、ここは…化学室かぁ。奇襲をかけるのにもってこいだね」

ワープで化学室に飛んだフラウ。天才化学者なだけあってあるものを勝手に拝借して色々やり始めた。

玲羅「いやっふー、銃とか色々あるねー。いや毎回毎回私はワープの場所に恵まれるねー」

倉庫に飛んだ玲羅はこちらも勝手に近くにある小型バズーカとゴム

鉄砲を入手。

ボールの大きさは色々なのでどんな武器にもちゃんと入ります。

ティム「よりによって書庫にワープするなんてついてない…」

書庫にワープしたティム。

ギルドの書庫は通称書庫迷宮。管理人以外はろくにその内部を把握する者は皆無だ。

「あれ？ティムさんいるんですか？」

ティム「あ、翼？いるのか？」

翼「あ、こんなところに。いやー、僕ついてますよ。ここにいれば最初に飛んだまま迷ってる人を狙い撃ちできます」

どうやら書庫迷宮の管理人の翼も同じ場所に飛んだようだ。

ティム「確かにお前がいれば有利だな。他に誰かいたのか？」

翼「ええ、いましたよ。エアリスさんと直耶さんが」

ティム「よし、しとめるぞ。俺が上からボールを投げるから、お前は適当に捕獲してみてください」

翼「了解です」

羽付きのティムと地の利がある翼。なかなかいいコンビらしい。ちなみに、HPのメーターは本人しか見れない。こればかりは適当に投げて行き当たりばったりにくいしかない。

エアリス「全く…何で俺がこんなのを…っ！」

バシユッ！

エアリス「チッ、もう来たか！」

ティム「エアリス、覚悟！！」

カキッ、コキッ

エアリスは自分の剣でボールを防ぐが、ティムが投げる速度がなんかやたら早いので少しずつHPが減っていく。

翼「苦戦してますね、ティムさん」

ティムがなかなかエアリスのHPをへらせていないのを見た翼はエ

アリスの背後から一番重くて威力のあるボールを取り出し至近距離から当てる。

幸い距離が近いたため、重くてもなんとか投げれたようだ。

エアリス「痛ッ！しまった、翼がいたか…」

翼「飛んで火に入る夏の虫ですよ」

ポムッ

エアリス捕獲。

黒チーム10点加算

ティム「お前…まさかここまで臨機応変だとは思ってなかったよ」

翼「場所がよかっただけです」

ティム「それより…っ！」

突如ティムの背後からボールが飛んできて、背中にもろ直撃。振り返るとそこにはいつからいたのか直耶がいる。

直耶「よう、ティム。なんか騒がしいと思って来てみればいきなりやってくれるじゃないか」

ティム「馬鹿だろお前、この翼が見えないのか？お前に地の利があるわけないだろ」

直耶「何言ってるんだ？お前、幻覚でも見てるのか？」

ティム「…あれ？」

ティムが振り返るといつのまにか翼は忽然と姿を消していた。
そして、思う。こいつはやっぱり馬鹿だと。

ティム「よし、直耶。勝負だ！」

いきなり言ってボールを投げるティム。

直耶も少し怪しみながらも応戦しだす。

お互い普段は武器を持たないのでひたすら投げる、投げる。

そしてお互いの投げた球が空中でぶつかり合い、両者ともにボールが当たらない。

直耶「…おいティム。これ、意味あるのか？」

ティム「すぐわかるさ。あと5秒後くらいに―…」

翼「翼チヨップ!!」

直耶「うはっ…」

バタツ、と大きな音を立てて倒れる直耶。

そしてその上に着地する翼。

翼「いやー、直耶さんの気を引きつけておいてくれて助かりましたよー」

ティム「にしてもまさかチヨップとはな」

翼「いやいや、ボール以外ではダメージにならないんですからこれ

が一番手っ取り早いです」

いいながらボールを直耶の上にくっつか落としては捕獲ボールを落とす翼。

それを何回かやるとHPがいい感じに減り、直耶を捕獲することに成功。

直耶捕獲。

黒チーム10点加算。

合計20点。

秋葉「んー、もう20点？すごいねー。誰か頑張ってるんだねー」

点数が加算されたりすると各々の携帯に情報がログ式に入る。故にコール音などは一切しない。

秋葉「んー、私どうしようかなー」

そして秋葉はというと、管制室に飛んだのだが、入口のドアに鍵がかかっていて開かない。管制室のドアは特別で、外からだけじゃなく、中からでも鍵がないとあけられないのだ。つまり、出られない。

秋葉「……どうしょー」

クレイズ「ああ、これもうやるしかないのか……」

ようやく現実を目覚めた人がここに。

中庭に飛んで、散々「死にたい」を連呼していたがやっと復活。自らの武器の大鎌を持って室内に入る。

キール「あ、クレイズだ……」

桜「一番捕まえやすい人が来ましたね」

クレイズは白黒闘争の時はいつも「死にたい」連呼してばかりなので毎回あっさり捕獲され、いつしか一番楽に捕まえられる人のレッテルを張られていた。

キール「おし、行くぜ！」

桜「援護しますー」

キールが至近距離へと迫り、大量のボールを投げ、桜も後方からボールを投げていく。

普段ならこれでノックダウンのはずだったが、

クレイズ「…こいつに負けるのは、納得がいかん」

なんか珍しく燃え、鎌を回転させてボールを全てはじき、鎌の先でキールをひっかけて後方へ飛ばし、そのまま桜にボールを投げつける。

桜「むー…容赦ないですねー」

されるがままの桜はそのまま捕獲ボールを投げられあっさり捕獲。

桜捕獲。

白チーム10点加算

そして、キールはというと、クレイズが桜を狙ってるすきに背後からボールを投げるが、ちょうど捕獲し終わったところだったので、一球を除いて全て偶然に避けられてしまった。

クレイズ「……」

キール「……」

何故か無言のやりとり。どうやら本人達には通じ合ってるらしい。

玲羅「あ、獲物発見」

2人の無言の会話は、クレイズの後方から珍しく笑顔で走ってくる玲羅によって中断させられた。

キール「げ、でた。…って、なんだその重装備!?!」

玲羅「あつははは いつもの3倍増しでお送りしておりますー」

クレイズ「最早キャラがたっていないぞ」

玲羅さんの装備はあれから倉庫で色々やってるうちにさらに増えて行き、飛び道具系を大量に装備した重装備になっていたが、こいつの暴走はいつもの事なのでなれていればまず驚かない。
なれていればの話だが。

玲羅「はい、掃射」

ドシューウウ…

軽々しい言葉とは裏腹にとてつもなく激しい発射音が響いたかと思うと、目の前の廊下の四方に大きなクレーター。そしてクレーターの淵、ちょうど射程距離のギリギリ外にはクレイズがいた。

クレイズ「…玲羅、お前…やりすぎだ」

玲羅「あれ？キールは？」

クレイズ「携帯見てみる」

キール、HPデスペナルティ―

白チーム1点加算。

合計11点

あ、デスペナルティ―ってのはHPゼロになったってことで。

玲羅「……やってしまった…」

クレイズ「…暴走は時と場合と威力を考えると」

クロム「あ、ローゼ君」

ローゼ「なんだ、クロムではないか。我に何か用か？」

クロム「はい、捕獲」

ローゼを呼びとめ、一番威力のあるボールを武器のハンマーでうち飛ばし、当たった直後に捕獲ボール。

最早毎回おなじみの捕獲方法（知らんがなw

ローゼ捕獲

黒チーム10点加算。

合計30点。

キール「はあ、何なんだよあいつ…。怖すぎだろ…」

デスペナルティーによる強制ワープで化学室に飛んできたキール。
怖さを抑えて外に出ようと扉に触れると、

ピンッ

キール「ん？なんだ？」

何かの音がした気がして周りを見渡しても何の変化もない。
もう一度扉を開けようと向き直ると、

ガコッ、バラバラバラ…

キール「いたたた、なんだコレ…。ボール？」

フラウ「や、キール。油断大敵だよー」

何処に隠れていたのか、いきなり出て来たフラウ。
どうやら今のはフラウの設置した仕掛けらしい。

フラウ「とりあえず、はい、捕獲ー」

そしてそのままキールが呆然としてるすきに捕獲ボールを投げ、捕
獲成功。

キール捕獲。

白チーム10点加算

合計21点。

ただいま、10分経過。

生存者、白4人、黒5人

白黒闘争前篇（後書き）

よければ感想お願いしますー。

白黒闘争後篇

玲羅「あ、そうだ、クレイズ青年」

クレイズ「なんだ、気味悪いぞ」

玲羅「あははは、と、とにかく、君がいれば打倒クロムも夢じゃないと思うんだけどー」

クレイズ「…だいたい予想はつくがあえて聞いてやる。俺に何をさせるつもりだ？」

玲羅「クロム捕獲のための罠に…」「断る」まじすか…」

クレイズ「俺はこのゲームであいつにかかわる事が一番嫌なんだ」

玲羅「えー、冷たいなー実の兄弟でしょー」

クレイズ「死にたくなるような事を言うな。実じゃなく義理のだ」

玲羅「でも仲いいじゃんー」

フラウ「そうだよ、君たちの兄弟愛はいつ見ても素晴らしいと思うよー」

玲羅「そうそう、よくわかってるねー」

クレイズ「どこから出やがった!?!」

ちなみに現在地は食堂。
移動してきた2組は偶然合流。
これで白チームの生存者4人の内3人が同じ場所にいることになった。

シオン「……どーにかなんねーかなコレ」

やっと登場したシオン。

前篇に出番がないと思ったら中庭で木にぶら下がっていた。

シオン「はぁー、まさかワープしたところが上空とは……しかも落ちる途中でひっかかるってどれだけ可哀そうな人なんだよ俺……」

サード「いや、君より僕の方が可哀そうだと思うんだけど」

こちらも前篇で登場シーンがなかったサード。

こちらはシオンがいる木のすぐ近くの時計台の上に居る。
時計塔でなく、あくまで時計台なので普通は人が乗れるような余分な面積はない。

サード「ここつてさ、元々人が乗るように設計されてるわけじゃないんだよ。今までずっと落ちずに頑張ってきた僕、すごくない？ていうか、正直誰でもいいからここからおろして欲しいんだけど」

シオン「…ってか、俺ら敵チームだよな？」

サード「そう言えばそうだった気がするよ」

シオン「それなら容赦無しで行くぜー！」

いきなりボールを投げ始めたシオン。

自分が身動きとれないっての忘れてやしないかい？

サードはと言うと、高い身体能力をフル活用して、時計台の裏に回り込み（というかしがみつき）なんとか回避する。

サード「ていうか、その状態、僕より君の方が不利だよ」

サードも見るからに辛そうな体勢のままボールを投げる。

シオンはよける事が出来ないのでどんどん当たる。

シオン「ってかこれ、ペナルティーで安全な場所に移動した方が早くねーか？」

サード「…それもそうだけど、僕は目の前にいるのをみすみす逃がすくらい甘くないよ」

そう言うときサードは捕獲ボールを投げつける。

シオン捕獲

白チーム10点加算

合計31点。

サード「で、降りれないんだけど」

クロム「さっきからあんまり皆に会わないな。皆何処居るんだろ」

一人を捕獲した以外はまだ誰にも会ってない医務室のクロム。
とりあえず外に出ると、少し遠くに大きなクレーターがあったので
とりあえず隣の化学室に入っておいた。

クロム「うわわっ！何コレ…」

はい、フラウが化学室から出るときに作り置きしておいたトラップ
です。（キールの時参照

クロムが周りを見渡しても誰もいない。

まあ、フラウは今食堂あたりだし。

クロム「ありゃー、HP今のでだいぶ減っちゃったなー」

ティム「さすがに自分から書庫にくるような勇者はいなさそうだし、そろそろ出るか？」

翼「そうですね。ずっとここに居るのももう暇ですしね」

書庫を出た2人。廊下を少し進み、翼がふと窓から外を見ると…

翼「…あれ、何やってるんでしょうか…？」

いまだに時計台から降りられないサードを発見した。

ティム「あれって、チャンスだよな」

翼「ですね。行きましようか」

サード「あ、なんか本能的に嫌な予感がする」

時計台の上で頑張ってるサード。

なんかもついつそ飛び下りればいいのと思う。

サード「ヤダよ。骨折れる」

ティム「おい、サード。お前そこで何やってんだ？」

サード「い、言うておくけど、さっきまでシオンもあそこで無様にぶら下がってたんだからね！」

翼「…だいたい事情はわかりました」

ティム「わかるのか!？」

翼「とりあえずチャンスです。ティムさんは反対側に回って下さい」

サード「ちょ、ちょっと、2人がかりは卑怯だよ!」

ティム「白黒闘争に卑怯もなにもないだろ？」

そう言うのと容赦なくボールを投げる2人。

サード「痛た…何か盾とかないかな…あ、ないか」

なんかもう諦めたらしい。

翼「ティムさんー。そろそろじゃないですか？」

ティム「だな。よしっ」

サード「とぉー」

綺麗によけたサード。

捕獲ボールを投げるときは、HPをこれ以上減らさないように通常のボールは投げないのが普通。つまり、捕獲ボールを投げられる時がよける方にとってはよけやすい。

普通はそんなことわかっててもなかなかできないが、サードの身体能力があれば可能なだろう。

翼「ていうか、捕獲ボールは1つしか投げちゃいけないなんて決まりはないですよね」

サード「あ」

ティム「あ、たしかに。よし、それならいけるな！」

サード「ちょ、なんでそーゆー事あつさり言っちゃうんだよ!？」

翼「敵ですから」

サード捕獲、シオン解放

黒チーム15点追加

合計45点

サードの捕獲と同時に、サードに捕獲されていたシオンが解放され、形勢逆転。

白チームが残り3人なのに対し、黒チームは5人になった。

ティム「て、それより、シオン、お前なんか可愛いな！」

シオン「しょうがないだろ。作者の趣味で解放された奴は2頭身なんだから」

そつ、解放されたシオンはハンデで2等身に。

ちなみに身長は普通の人の腰ほどの高さ。結構ちっちゃい。

玲羅「ぬうん。今萌えの気配が…」

クレイズ「だからどうした。書いてあったら？シオンが解放って」

フラウ「ていうか、これで白チーム僕等だけだね」

玲羅「んー、これは、たぶん中庭あたりかな…？」

クレイズ「てことは慎重に行った方がいいな？」

フラウ「そうだね。下手に動いて3人まとめて捕獲されたら終わりだからね」

玲羅「よし、たぶん中庭！レッツゴー」

「「お前は人の話を聞け」」

萌えの事になると周りが見えなくなる玲羅。
正直ただの変な人です。

玲羅「とにかくー、中庭行けば敵さんいるからー、たぶん3人」

「何故わかる!?!」

本当、すごいね。超能力者ですかあ？

玲羅「とりあえず、こっちも解放しないと負けるからねー、行くよ、ほら」

クレイズ「…仕方ないな」

フラウ「まあ、安心して。いざとなったら僕のリュックの中の改造銃達が生火を吹くよ」

言いながら移動し始める3人。

程なく中庭が見えてきて、玲羅の言った通り3人いた。

クレイズ「…お前、本気で超能力者になれよ」

玲羅「考えてみるさー」

フラウ「2人とも、静かに。あつちはまだ僕たちに気づいてないから。奇襲をかけるよ」

クレイズ「まあ、気付かれたらできるだけ俺が相手のボールを撃ち落とすようにする。フラウ優先で」

玲羅「レディーファーストはどこへ行った!?!」

クレイズ「お前、まだ誰も捕獲してないだろうが。フラウよりお前

が捕獲された方がリスクが少ない」

玲羅「酷いやorz」

フラウ「ほら、落ち込んでないで行くよー」

ティム「んじゃ、残り3人探しに行くかー」

翼「そうですねー」

バシユツ、ドムツ！

翼「痛ッ！つう…あはは、どうやらあちらさんの方から来てくれたみたいですよ」

ティム「玲羅とフラウか…。これまた面倒な2人が…」

シオン「とりあえずこっちも投げようぜー」

玲羅「はう！シオンかわええ…」

シオン「うわ、やば、玲羅が暴走してやがる！」

暴走した玲羅はシオンの投げるボールをなんらかの力で撃ち落としながらもすごいスピードでシオンにボールを投げつける。（きつと暴走した萌えの力）

フラウ「よし、行くよ！」

ティム「イテッ…。ちょ、翼、俺を盾にするなって……」

フラウ「あれ？」

ティム、HPデスペナルティー

白チーム1点追加

合計32点

玲羅「ていつ」

シオン「うわっ！」

シオン捕獲

白チーム10点追加

合計42点

フラウ「あとは、君だけだよ、翼」

玲羅「あれー、よく見たら2人も捕まえてるねえー。新たな萌え……」

フラウ「いやいや、逆転のチャンスだよ」

さりげなく強すぎた2人。

とりあえずアレだ。白黒闘争において遠距離の武器は最強ってこと。

クレイズ「というか俺の出番ないじゃないか」

2人が勝手にでてって勝手に色々やってくれちゃったおかげで出るタイミングを逃したクレイズ。

クレイズ「仕方ない、強制ワープしたティムでも探すかー……あ」

少し前までサードがいた時計台を見たクレイズは、そこで何かを見つけた。

秋葉「はあ、なんか中庭が楽しそうなのに私は何やってるんだろ……」

相変わらず管制室に閉じ込められている秋葉。
と、いきなり開くはずのない扉が開いた。

クロム「あれ？秋葉ちゃん？どうしたの、こんなところで…」

秋葉「助かったーっ！！」

常に管制室の扉の鍵をもっているクロム。

鍵がかかったのでなんとなく開けてみたら中に秋葉がいて相当驚いたらしい。

秋葉「ねえ、なんかさっきから中庭が騒がしいよ。残りの皆、全員中庭にいるんじゃない？」

フラウ「よし、手っ取り早く行くよ」

玲羅「あいさー」

「とおっ
」

「消えろっ！」

「「痛っ！！」」

「うはっ！」

翼「…何やってるんですかティムさん…」

ティム「翼の真似」

説明しよう！フラウと玲羅が翼に攻撃しようとした瞬間、上空からティムが落ちて来た。そして2人にチョップをかました瞬間、廊下の方から猛ダッシュしてきたクレイズに蹴り飛ばされて翼の正面に倒れた。

そして今に至る…。

フラウ「ティム…君はなんて事を…地味に痛いよコレ」

玲羅「この恨み、捕獲してはらせてもらっよー」

クレイズ「…もうなんでもいいから早く終わらせてくれ」

翼「ティムばつかに気を取られてると身を滅ぼしますよ」

クレイズ「いつ！お、お前、何一番重いの投げてんだ」

翼「さあ？僕の腕力がすごすぎるせいでしょうか？」

クレイズ「お前、運動はからきしじゃなかったのかよ…」

翼「それより、そろそろ捕獲させてもらいますよー。HPもだいぶ減ってるはずです」

クレイズ「さあ、どうだろな。(つて、1しかねえ！1で残るならせめて0のがまだよかっただろ、絶対！)」

「ていつ」

コツツ

翼「ん？秋葉さん？」

クレイズ「あれ？」

クレイズ捕獲、桜解放

黒チーム15点追加

合計60点

フラウ「あ…」

玲羅「差が開いたじゃないのさー、ばっきやるー!!」

ティム「ちょ、だからって俺に当たるなってえ！」

ティム捕獲、サード解放

白チーム15点追加

合計57点

サード「くつ、この僕が2等身だなんて…屈辱すぎる…」

玲羅「黙らんと潰すよ」

秋葉「やつふー！やつとなんかできたー」

桜「秋葉…貴方今まで何してたの…」

フラウ「それより、全員いるし、これはバトルロワイヤルになりそうだねー」

クロム「3人対4人だけだね」

玲羅「人数差はこの際関係ないんよー。今捕獲して一番おいしいのはバサ兄！」

翼「あ、やば…」

玲羅「すでにだいぶHP減ってそうだし2人も捕獲してるし…」

クロム「え、本当！翼君すごい」

サード「はいはい、すごいすごい。そして残念でしたー」

翼「な…いつのまに…」

サード「え？さっきから後ろで一番小さいボールをちまちな当てたの気付かなかった？」

どうやら小さいボールを気づかれないようにゆっくり当てて本当少しずつHP減らしてたそうな。

まあ、大して意味がない気がするのだが、この際気にしない。

翼捕獲、エアリス、直耶解放

白チーム20点追加

合計77点

玲羅「わー、ぞろ目ー。と、これでそっちに勝ち目はなくなったね」

クロム「……ていやっ！」

玲羅「！？う…鳩尾に…！？」

前回同様ハンマーでボールを超スピードでうち飛ばした。

この攻撃、当てる場所をちゃんと狙ってやってるならかなり危険だ。

クロム「えー僕がそんな狙ってやるなんて酷い事するわけないじゃん。はい、捕獲」

玲羅捕獲、シオン解放

黒チーム15点追加

合計75点

フラウ「ふう…玲羅でまだよかったよ。次は僕の番かなー」

そう言うフラウは背中のリュックから巨大な大砲（連射式＋追尾機能付き）×2を取り出して、ろくに狙いもつけないまま発射させた。

秋葉「うわ、フラウの無差別攻撃だっ！」

直耶「ちょ、フラウ！HPは減らなくても俺達も普通に痛いから！」

桜「ていうか捕獲以前にHPなくなっちゃいますー」

クロム「あ、やば」

クロム、HPデスペナルティー

白チーム1点追加

合計78点

化学室でフラウの仕掛けにかかったクロムは真っ先にHPペナルティーで強制ワープ。

他の人はHPが0にこそならなかったが、だいぶ減っている。

その代わり仲間もHPは減らないものの何度も直撃してだいぶ重症のようだ。

桜「あ、もしかしてチャンスですか？」

ここぞとばかりに大量のボールを投げつける桜。

重症組のエアリスと直耶はなんとか半分くらいよける事が出来たが、サイドはというと、フラウの無差別攻撃を2回ほど直撃して気絶していた。

勿論桜の格好の的になっている。

桜「それっ」

桜は適当にボールを投げ終わると捕獲ボールを数個取り出し、サードに投げた。

ポムッ

サード捕獲、翼解放

黒チーム15点追加

合計90点

エアリス「これはやばいな……」

フラウ「うん。これは非常にやばい」

直耶「諸悪の根源のお前が言っでどうするよ」

秋葉「よし、私も頑張るよー!」

エアリス「とにかく、HPは減ってるんだ。適当に捕獲ボール投げれば捕獲できるだろ」

秋葉「そんなんじゃないよっ……あれ?」

言ったそばからエアリスの捕獲ボールに当たった秋葉。
天然なのか、そうなのか。

秋葉捕獲、クレイズ解放

白チーム15点追加

合計93点

直耶「よし、クレイズがいればなんとかあいつらのボールから身を守れる!」

フラウ「というわけでボール打ち落としてねー任せたよ」

クレイズ「もう俺死にたい……」

「「また最初に戻りやがった!」」

ピピ

どこからか笛の音がした。

クロム「はいはいゲーム終了」

結果

白チーム93点、黒チーム90点

クロム「ま、そういうわけで白の勝ちだね。大変不本意だけど」

玲羅「あれ？私耳が腐ったかな。クロムの口から不本意なんて言葉がでてくるなんて」

エアリス「大丈夫だ、俺にもちゃんと聞こえた。」

おまけ結果

生存人数

白チーム4人、黒チーム4人

解放人数

白チーム4人（4回）、黒チーム3人（4回）

パーフェクト

フラウ（白）、クロム（黒）

シオン「てことはこの2人以外は終了時皆捕獲されてるか2等身だよな……」

秋葉「フラウが生き残るとか意外すぎるけど……」

桜「それに、結果がどうも平均的ですよね」

要「え、でも別に狙ったとかそういうのではないよ？」
かなめ

「「出た作者」」

奏音「作者ってひとまとめに言わないで欲しいねー。今回は合作なんだからー」

要「ま、ほとんどが俺で、たまに入る悪ふざけ（？）が奏音の部分なんだけど」

奏音「気にするな、奏音と要の書き方って似てるから（というか要の書き方を奏音がまねた）だれもきづかないさー」

クレイズ「裏話を持ち込むな」

要「気にするな、どうせここは後書きみたいなもんだ。後書きじゃないけど」

奏音「はい、じゃあ、また次作があれば 小説のネタがなくなったら今度は二次創作でやるよ」

クロム「無理やりしめたね……」

要「このまま後書き化しそうなのでここでㇼだ。ちゃんとした小説は、結果の前までだと思って割り切ってくれるとありがたいよ」

挿絵（？）のコーナー

> i 2 9 2 1 1 — 1 6 3 1 <

天音「ども、天音だよ。桜坂電波塔始動記念の小説、いつも二次創作読んでくれてる皆さんも読んでくれてたら嬉しいな。

今回の挿絵は、私達桜坂電波塔のイメージ絵みたいなのだよ。（第3のところは見て見ぬふりを…）

私の独断と偏見で3人をイメージ化したのだから、実際の姿とは結

構異なるのでご了承ね。

それじゃ、また機会があれば会いましょう！
出番が少ないイラスト担当の天音でした」

白黒闘争後篇（後書き）

読んでいただき、ありがとうございましたー。

オリジナルだからいつも二次創作を読んでもくれてる皆さんはあまり読んでくれないかもしれないですね…。

読んでくれてたら嬉しいです…！

感想、気軽に書いてくれると嬉しいです。

では、また二次創作の方でお会いしましょうー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7918v/>

白黒闘争～夜桜の巻～

2011年10月7日19時31分発行